

9世紀ローマの反イコノクラスム、聖遺物崇拜をめぐる教会堂装飾

—サンタ・プラッセーデ聖堂のモザイクを中心に—

加藤磨珠枝（立教大学）

ローマのエスキリーノの丘のふもとに位置するサンタ・プラッセーデは、すでに491年の記録に教区教会として名が残るが、現在の聖堂は、9世紀のローマ教皇パスカリス1世（在位817-24年）が新たに造営したものである。その際、彼は2千体以上の聖者の聖遺物を市外のカタコンベから遷移させ、堂内に安置したと伝えられる。聖堂は幾多の改修を受けたものの、当時のモザイク装飾が内陣周辺および右側廊中央のサン・ゼノーネ礼拝堂内部に見事な状態で保存され、観者を魅了する。

初期中世ローマの美術史研究において、本聖堂はもともと体系的な研究がなされたモニュメントで、これまで多くの成果が論じられてきた。一般的に、当時の教皇たちが推進した教会堂建設は、コンスタンティヌス大帝以後の「教会の勝利の時代」を模範とする復古的側面が強調され、カロリング・ルネサンスとも呼応して理解される。サンタ・プラッセーデはその代表作として、建築については旧サン・ピエトロ大聖堂、聖堂内装飾も初期キリスト教時代のモデルからの影響が顕著である。

その一方で、グッドサン（2010）に代表される近年の研究では、建築について同時代作品との関連性が注目され、従来、繰り返されてきた初期キリスト教時代の単なるコピーではないことが明らかにされた。また、内部空間でもくろまれた典礼的機能と装飾プログラムの関係、当時の聖遺物崇拜のあり様、イコノクラスムを背景とする教会政治のプロパガンダ的要素、寄進者であるパスカリス自身と彼の母への救いの願いなど、9世紀初頭ならではの独自性が様々な視点で論じられ、まさに初期中世ローマを体現する作例との評価にまでいたっている。

本発表では、これら先行研究を踏まえつつ、モザイク装飾の造形的源泉について考察を試みる。9世紀前後にローマで復興するモザイク制作は、教皇レオ3世（在位795-816）を端緒とするが、その活動については、都市ローマで細々と息をとどめた「ローマ派」工房によるもの、あるいは教皇領となつて間もないラヴェンナからの技術導入、また中期ビザンティン美術との類似点からビザンティンの影響が論じられている。それらについて検討を加え、発表者が新たに提示するのは、イタリア半島のビザンティン帝国領として重要な役割を果たした南イタリア、プーリア州やシチリア島の美術との関係である。現存作例はきわめて限られるが、シラクサのサンタ・ルチアのカタコンベに残る当時の壁画等との比較を通じて、サンタ・プラッセーデのモザイク装飾の生成問題について考えたい。ビザンティン世界でイコノクラスム締結後、聖像復興に尽力したコンスタンティノポリス総主教メトディオス（在位843-847）が、まさにシチリア島の出身で、815年にはじまる後期イコノクラスムの迫害の折には、815～821年の約7年間、ローマで避難生活を過ごした歴史的事実を鑑みても、同時代のローマ教皇パスカリスの美術を、ビザンティン帝国の聖像擁護派の芸術環境との相互関係において再検討してみる価値はあるだろう。